

Interview / Shoo Yamamoto
Editing / Shoji Smily

vol. 166

義足のハイジャンパー
鈴木 徹



■ 鈴木徹 | Toru Suzuki

1980年、山梨県生まれ。駿台甲府高校時代にハンドボールで国体3位の記録を残す。1999年、自らが運転する車がガードレールに激突。右足膝下11cmを残して切断する。事故後、ハンドボールで復帰するために、リハビリの一環で走り高跳びを始める。競技開始からわずか3ヶ月でシドニーパラリンピックの標準記録をクリア。日本人初の高跳び選手として、シドニーパラリンピックに出場。2005年には日本で初めての「義足のプロアスリート」となり、パラリンピックワールドカップ、ヨーロッパ選手権で銀メダルを獲得し、世界ランキング2位に輝く。一方で、健常者の一般大会にも出場をし、2006年には東京陸上選手権で6位に入賞するなど、スポーツにおける「バリアフリー」を追求し、体現し続けている。また、「自らの可能性をあきらめない」をテーマに、学校を中心に講演会活動も精力的に行っており、各地での実績を重ねている。

■オフィシャルサイト・・・<http://suzuki-toru.com/>

■ Page Index

「右足を失くしてから前向きになったかも・・・。」
「後悔したくないっていう気持ちがあるんで。」
「競技環境は決して良くはないですよ。」
「世界記録を作りたいですね。」

Prologue

『もし神様が右足をくれると言っても、僕は多分いらないって言うと思う』。これは決して強がりでもなんでもなく、鈴木さんは今、本当に幸せそうだ。きっと、鈴木さんのことだから、もし事故に遭わなかったとしても、それはそれで楽しくやっていたんだろうけど、鈴木さんの今の生活と、それを比べることは出来ない。スポーツの世界で活躍して、パラリンピックの旗手を務めて、愛する家族がいて・・・。鈴木さんの幸せに、足りないピースなんて何1つない。

『もっと運がよければ・・・』『もっといい環境にいれば・・・』。つつい考えてしまうことだけれども、ほんとは、そんなことは、幸せとあんまり関係がない。『周りのせいにするということは、自分で責任を取らないことだと思うんです』。幸せそうにしている人はみんな、周りがどうであれ、自分から周囲に働きかけて、好きなことをやっている。もちろん失敗することもあるけれど、それはそれ。次の幸せに向かって、また立ち上がればいい。だって、自分で走って、自分でこけたんだから。鈴木さんの考えは、恐ろしいほどシンプルだ。怪我をしても、たとえ、片足を失っても、立ち上がって走り続ける。それ以外に、自分を幸せにする方法は無いから。ピュアでシンプル。人の強さって、結局はそういうことなのかもしれない。

<Yusuke Sawaki>

1. 「右足を失くしてから前向きになったかも・・・。」

シュウ:「鈴木君はいろんな所で講演をしたり、コラムの執筆もやってはるみたいですけど、あなたみたいな人はもっともっと人前に出ていったほうがいいよ。特に今。勇気をもらう人も多いと思う。右足を切断してからハイジャンプを始めたとか。どう考えてもめっちゃ前向きっていうか。」

鈴木:「事故の前はそうでもなかったんですけどね。右足を失くしてから前向きになったかも・・・。」

シュウ:「いやあ、事故の前からちょっとおかしいよ(笑)。天然だよな。言われた事ない？ だってさ、あなた昔、ハンドボールをやってたんでしょ？」

鈴木:「最初はバスケをやろうと思ったんですけど、練習がキツくて。それで他の部活を見てみたら、『ハンドボール、いいなあ』って。」

シュウ:「だってその頃、ハンドボールって宮崎大輔がいた訳でもないでしょ？ そこからしてちょっと変わってるよね。だって、元々スポーツの世界でご飯を食べたいと思っていたんでしょ？」

鈴木:「確かに当時のハンドボールの人気は全然でしたね。まあ、スポーツ選手として食べていきかかったら、普通はサッカーとか野球を選びますもんね。・・・うーん、何でハンドボールにしたんでしょうね？(笑)。」



シュウ:「ちょっと変わってるよね(笑)。そう、まず鈴木君に会って、誰もが聞きたいと思うまず1つのポイントとしては・・・例えば、俺やったら喋る仕事をしてるよね。じゃあ、明日から声が出えへんようになったらどうする？ ちゅうことよ。マラソン選手やったら、明日から足動かへん、どうする？ って。鈴木君は、それを体験してる。プロとしてハンドボールをやっていくって決めていたのに、ある日事故で足を失ってしまった。でも、あなたは事故して10日くらいでもう立ち直ったんでしょ？ ありえへんて。普通は車椅子乗って、そのまま病院の屋上行って金網壊して・・・って。」

鈴木:「親は僕がそうなるんじゃないかって思ったみたいですね。お父さんは、一週間くらい病院に泊まっていたから。当時、病室から飛び降りたりする人が多かったらしくて・・・。僕は1回も思いませんでしたけど。本当に1回も。」

シュウ:「天然や・・・。」

鈴木:「どうにかしてスポーツやろうと思っていましたから。だって、もうそれしかない訳ですからね。勉強も音楽も絵もできなかった。本当に運動以外に何にも才能がなかったんですよ。スポーツしか、生きる道がなかった。他にあるんだったら、他にいったかもしれません。」

シュウ:「いや、そうじゃなくて、鈴木君がすごいのは、そこまでの怪我をしたら、『ハンドボールはもう辞めなさい。あなたが今まで描いてきた夢は全部諦めなさい。今までの努力は全部水の泡ですよ』って突きつけられているようなもんやん？ ってか、普通はそう考えるでしょ？ それやのに・・・。」



鈴木:「はあ・・・、そうは思わなかったですね。逆に、義足を付けても、今までの経験は活きると思っていましたからね。正直、すぐにできると思っていたんですよ。義足を付ければ、すぐに走れるって(笑)。」

シュウ:「もう、世界最高の天然やん！！(笑)」

鈴木:「本当にそんな感じだったんですよ。だから足を切断してからも、足がある自分のハンドボールのビデオ見ていましたし。親がビックリしてましたよ。『もう足が無いのに・・・』って。でも、義足を付けてプレーする事が僕の中では決まっていたんで。だから、これからはどういうプレーをしようかなと。」

シュウ:「普通はしばらく、周りもその話題は避けるよ。」

鈴木:「うーん・・・確かに見舞いに来てくれた人がちょっと困ったりはしましたね。みんな病室に入る前に、僕とどうやって接しようかと一生懸命考えてくれるみたいなんですけど、実際に喋ってみたら、僕があまりに普通なんで。逆に変な距離ができた(笑)。」

シュウ:「そらそうやって～！ 普通は死ぬとか考えたりするよ。『もう生きててもしゃあない』とか。それを思わんっていうのがさあ・・・。

人間って誰でも『あの時ああしてなければ』っていうのがあるやんか。大抵の人はそれを心の中に隠して生きていく事もできるけど、鈴木君は足を膝下から失ったっていう、ある意味『しるし』がある訳だよ。毎日義足を付ける時にそれを見る。そこに勝ったんだよね。」

鈴木:「いや、まあ・・・でも、怪我をしたから今の自分があるので、そう考えると怪我をしてよかったと、本当に思いますね。」

シュウ:「だからそこよね。鈴木君の場合は、『あの事故がなかったら』じゃなくて、『あの事故があったから今がある』っていう風にベクトルを瞬時に変えてんな。それはもう、アスリートの能力というより、鈴木君個人のキャラクターなんやろうなあ。あと世代。『こうあらねばならない』『こうじゃないと幸せにはなれない』っていう教育を受けて洗脳されてきた世代だと、それを失った瞬間にそこで『アウトや』ってなっちゃうもんなあ。ところが、今の若い子達の世代はそれが薄くなってるんよね。俺なんかも子供に何かあった時、飛び降りずに次に向かえるように育てたいと思ってんねん。要は『なんでもええねん』で。何やってもええ、そこでハッピーになれって。鈴木君は、28歳にしてそういうことをしっかり理解してる訳や。ほんまにすごいと思うよ。」



2. 「後悔したくないっていう気持ちが常にあるんで。」

シュウ:「でも、どんだけ天然の鈴木君でも、実際に義足を付けてみて初めて直面した厳しい現実があったんだよね。」

鈴木:「そうなんです。全く歩けなかったんですよ。リハビリは時間もかかるし、すごく痛かったし。しかも、リハビリをやる時間も限られていたから、やりたくてもできないっていうことも多かったんです。それで最初はモチベーションが下がったりもしたんですけど・・・でもまあ、結局1日目だけでしたね(笑)。僕、昔からそうなんですけど、寝たら忘れるんですよ。その時も1日寝たら『仕方ないか』って。」

シュウ:「面白いわ～。そういえば鈴木君は以前『人生山あり谷ありの方が面白いけど、その『谷』はなるべく早く終わらせるのがいい』って言うて



はったよね。」

鈴木:「そっちの方がいいと思いますね。」

シュウ:「それにしても、めっちゃ早いやん！ あと、他にもめっちゃめっちゃカッコいい言葉言うてたよ。『もし神様が右足をくれると言っても、僕は多分いらないうて言うと思う』って。カッコよすぎでしょ！」

鈴木:「いやいや(笑)。でも、後悔したくないっていう気持ちが常にあるんで。本当にそんな気持ちで毎日を送っていますよ。もちろん、足がある自分がどこまでいけたか見てみたいと思う時もありますけどね。ハンドボールで宮崎君とどれだけやれたのか、とか、足がある状態でハイジャンプをやっていたらどうなったのか、とか。でも、それは叶わない夢なんで。」

シュウ:「基本、めちゃいい意味で『エエカッコしい』なんだよね。それがパワーになってると思う。この『カッコいい』っていうのは今すごく大切に、今の若い子と話す時にもめっちゃめっちゃ重要なキーワードなんだよね。昔の人よりも、今の若い子たちの方がすごくフラットに物事見てるから、カッコいいヤツ、カッコ悪いヤツってちゃんと選んだよね。そういう意味では、すごく素直に自分の声に反応してるよね。世の中の常識とかじゃなくて。」

鈴木:「それはあると思いますね。僕も、自分がやったものしか信じないようにしているんですよ。人間不信とかではないけども、みんなと同じ事をやっているっていうことで安心する事はないですね。逆に、1人で新しい事をやっていた方が楽しいタイプ。だから、こんな生き方になったのかもしれないですね。」

シュウ:「そうだね。せっかく『自分』に生まれてきたんだもんねえ。僕がこうやってインタビュアーをやってて伝えたいことの1つは、一流として活躍している人はみんな、ものすごく自分に正直だということ。これが基本やと思う。戦後の日本がやってきた教育の中で奪われたものだよ。当時はそれはそれでよかったかもしれないけど、これからの若い子は自分のほんとに好きな事で勝負するっていうこと、そのためにまず『自分の声に耳を立てる』という事が大事だよ。後悔しないために。」

鈴木:「そうですよね。つまりそれは、自分で責任を持つ事ですからね。親がこう言った、とか先生がこう言った、とかいうのは、要するに、その人に責任を押し付けることになるんですよ。」

シュウ:「そう。でも、責任を押し付けた瞬間、自分が辛いよね。自分が失敗したのはこいつのせいやと思ったら腹立つもんね。」

鈴木:「きっと、みんなもそれは分かっているんですけど、やっぱり自分で背負いたくないんでしょうね。頭がいい人ほど褒められてきているじゃないですか。怒られたことがないんで、失敗を失敗と認められない人も多いんですよ。スポーツでも、1位じゃないと『負け』なんですよ。」

あと、僕がいつも変だと思うのは、勉強ができるヤツが金髪にしても怒られないこと。でも、勉強できないヤツが金髪にすると怒られる。おかしいですよ。これも、勉強ができればいいっていう世の風潮が生んだものなんですよ。でも、違いますよね。それが勉強じゃなくて音楽でもいいし、絵でもいい。それを選ぶのが人生の宿題だと思います。僕は早目に選べたからよかったかなって。」

シュウ:「その通りやと思うわ。特に今、鈴木君みたいな人の言葉は若い子に必要やねん。ちょうど今、時代の価値観が新しいものへ……というより、元々の正しい価値観へと戻ろうとしてるんだよね。だから、これからの世の中で正しいものをチョイスするためには、あなたのように、常に自分の心の中に向いて、『これおかしくない？』『これ意味分かん』って思うことが大切やねんな。ほんで、鈴木君の場合は、ちゃんと自分の体験の中で答えを見つけてきたってことが素敵よね。」

あと、鈴木君は講演とかで『片足の自分にもできるんだからみんなもできるはずだ』って言ってはりますよね。でも、あなたの強さは、どちらかという天性の部分なんじゃないかって思う人もいると思うんだけど……みんなが鈴木君みたいにできるって、本当に信じて言ってるの？」

鈴木:「はい。別に僕は自分が強いとは思っていないというか、多分、普通よりも弱いと思うんです。でも、いろいろやっていく中で強くなっていくんじゃないかって。で、それはやっぱり、自分で物事に責任を持っているからだと思うんです。あと、好きなことをやっていく中で、苦手なことも克服していけば、それが自信になるんですよ。みんな、苦手なことを克服しようって、元々マイナスだったものをゼロにしようとするから、嫌な気持ちになって自分のことが嫌いになったりするんです。でも、自分が持っているプラスのものをもっとプラスにすれば、多分突き抜ける人が出てくると思うんですよ。自分のやりたい事がそこにある訳ですから。



なんで任天堂DSが面白いかといえば、楽しいからじゃないですか。勉強が何でつまらないかといえば、何の為にするかが分からないからなんです。でも、僕は、夢を叶える為には勉強も必要だと思うんです。それは高校3年生の時に初めて分かったんですよ。ハンドボール選手になりたい。でも筑波大学行くには評点が足りない。これはヤバい。そう思って。そういう時は、男って絶対やるんですよ。逆に言えば、必要性が分かんないとやらないんですよね。」

シュウ:「鈴木君はそういうのを、誰かから教えられた訳じゃなく、感覚でやってるんだろうね。だからカッコいい。ほんで、どんどん答えが見つかるんだろうね。・・・でも、やっぱり1人じゃ頑張れないんだよね。支えてくれる人がいるから頑張れるんだよね。」

鈴木:「そうですね。でも、初めからそういう人たちを集めようと思わなくても、自分が何かをやっていく事で、応援してくれる人って増えていくんですよね。」

シュウ:「ほんと最近の若い子はすごいね。面白い。時代がそういう若い子らのハートを押ししてるんだろうけど、『勉強できるやつが偉いっていうのはおかしい』とか、俺らも思ってたけど、今は10代の子らが、そういうことを本質的に理解してる。だから今、鈴木君がこの世の中の空気吸って、心の中で感じてる事は未来へのキーワードになってるんやで。

・・・いやあ、それにしても鈴木君の『もし神様が右足をくれると言っても・・・』っていうのはカッコよすぎるよね(笑)。」

鈴木:「だって、足をもらっちゃったら、パラリンピックに出られなくなっちゃいますから(笑)。」

シュウ:「ハハハ！面白い！芸人の話を聞いているみたい！髪の薄い芸人が『おいしいから増毛しません！』みたいな(笑)。さすがやわ。」

3. 「競技環境は決して良くはないですよ。」

シュウ:「鈴木君がプロになるって言った時、みんなが反対したと思うんだけど、それを鈴木君はどうやって説得したの？」

鈴木:「自分がやるんだからいいんじゃない？って。結局、苦しい思いをするのは周りの人でも親でもなく、自分じゃないですか。単純に、『自分の人生だから』って。自分が楽しいから。本当にそれだけです。楽しいと思ってやっていることであれば、途中で嫌なことがあったとしても、そこで折れたりはしないものなんですよ。」



シュウ:「鈴木君の話を聞いているとさあ、『楽しい』とか『面白い』って言葉

がいっぱい出てくるよね。あと、この前アメリカに1人で行ったそうだけど、その話も聞かせてよ。」

鈴木:「ゴールデンウィークに、試合で行ったんですけど…正直、試合よりもいろんな手続きとかが疲れでしたね(笑)。で、その時の経験で思ったのは…よく言う話ですけど、『人間追い詰められて必死になれば何でもできる』ってことですかね。さっきの勉強の話と一緒にですよ。英語ができない人でも、英語を話さないといけない環境に置かれたら話そうとするじゃないですか。『ヤバイ』と思ったら、必死になるんですよ。ちなみに、その時の試合では、100メートルと高飛びで自己ベストを出したんですよ。」

シュウ:「へええ。そうなんや。鈴木君の言葉で『ヤバイ』もポイントやな。『ヤバイ』と思ったらやる！ それ、大切よね。…そうそう、海外はどうか分からないけど、日本だと、どうしても障害を持った人って過保護にされるじゃない？ で、本人もどっかそれに甘えて、性格がわがままになったり、偏ったりする人も多いんじゃない？」

鈴木:「正直それはあります。やっぱり親が心配しすぎて、どうしても過保護になっちゃうんですよ。でも、パラリンピックに出る人たちには、そういう人は少ないですけどね。自分で何でもできないといけない世界なんで、車椅子の人も平気で段差上がってきますし。」

シュウ:「一般の、障害を持った人と接する事はある？」

鈴木:「もちろんあります。やっぱりみんな、大事にされてるなあ、って感じですよ。逆に言えば、『人間として扱われてないなあ』って感じることもありますね。物を大事にするような感じで…でも、そうやって大事にしてくれる親や周りの人は、普通はその人よりも早く死んでしまう訳じゃないですか。その時に困るのは本人ですからね。だから僕は、今からできる範囲の事は全部自分でやるようにしています。そうしておいた方が、後で困らないと思いますから。贅沢な生活をずっと続けてきたお金持ちの人が、貧乏になってしまっても、なかなかその生活を変えられなかったりするじゃないですか。贅沢に慣れてしまうと、庶民の生活に戻れなくなってしまうんです。要はそこなんですよ。もちろんそれは、本人だけの問題ではないんですけどね。周りが必死になって過保護にってしまうということもありますし。」



シュウ:「そうそう。見てて可哀相やなあって思うのは、そういう過保護な愛情ね。」

鈴木:「そうなんですよ。それで結局、本人にはそんな気がなくても、周りからは『甘えてる』って見られるじゃないですか。」

シュウ:「でも、そうなっちゃうよね。それが可哀相やなあ。そうになってしまうのは、『何の為に教育するの？』っていう根本的なところが、その親の年代に全然行き届いてないからやと思うんよね。みんな、基本的には一緒やのに。自立してやっていかなあかんのは本当に誰でも一緒やから。」

鈴木:「例えば国の管轄上も、オリンピックがスポーツであるのに対して、パラリンピックは福祉なんです。この違いはすごく象徴的で、結局、障害者である以上、アスリートとしては扱ってもらえない部分があるんです。あくまで、障害者のレクリエーションの延長というか…。だから、使わせてもらえないトレーニング施設があったりもするし、パラリンピック競技者にとっての競技環境は決して良くはないですよ。世の中にそういう意識の区別がある限り、本当の『バリアフリー』は実現しないと思いますね。」

4. 「世界記録を作りたいです。」

シュウ:「鈴木君は今28歳だけ？ 歳の割にすごくしっかりしてるけど、でも、全然肩肘張ってる感じがしないよね。」

鈴木:「そうですね。確かに、基本的にいつでもどこでもリラックスしているかも。電車の中でもリラックスしているし、人と話をしてもリラックスしているし…。多分、自分の好きな事をやっているから、そんなにストレスが溜まらないんですよ。だから逆に、わざわざ『リラックスする』っていうのが難しいかもしれないです(笑)。酒もそんな飲まないし、たばこも吸わないですし。」

シュウ:「そういえばさ、たばこを吸わない鈴木君から見て、喫煙者のマナーに関して気になっているところってある？」

鈴木:「ポイ捨てはたまに目につきますね。車からのポイ捨てとか。あれは信じられません。」

シュウ:「ポイ捨てね～。昔はよく見かけたよね。でも、今は道とかかなり綺麗になったんじゃない？」

鈴木:「そうですね。前よりだいぶ綺麗になりましたよね。」

シュウ:「あと、鈴木君に聞いてみたいのは…そうやなあ、その歳にしてそれだけものが見渡せてるんやったら、周りにも素晴らしい人がたくさんおるんでしょ？ 多分、1番は嫁さんやろうけど…そういえば、嫁さんでどんな人なん？」

鈴木:「しっかりしてますね。僕より5才年上なんですけど。」

シュウ:「病院で知り合ったんだよね？ 看護師さんとしていろいろ支えてくれたそうだけど、実際何が支えになったの？」

鈴木:「病院にいる時の僕の受け持ち看護師だったんですよ。で、僕もさっきからいろいろ言ってますけど、やっぱり足を切断するってことが分かった時は、『とても自分の中だけでは背負えない』と思ったんです。でも、最初はそれを他の人に言えなかった。カッコ悪いところを見せたくないというか。病院でも寝巻きは着ないでちゃんとジャージで過ごしてましたし(笑)。でも、ある時『もう限界だなあ』って。それを彼女にちょっとずつ話していったんですよ。自分がカッコ悪いと思うこととか、嫌なこととかを。そうしたら、すごく楽になっていって。彼女はすごく優しくったんですよ。休みの日にも病院に来てくれたり。」

シュウ:「で、どうやって交際に発展したん？」

鈴木:「結局3ヶ月間入院していたんですけど、退院の時が迫ってきて、『このまま退院したら、もう会うこともなくなっちゃうんだな』と思って、僕から電話番号聞いたんですよ。いつもはあんまりそういうことをするタイプではなかったんですけど、なんとなく。それで、やりとりをしているうちにいつか…。」

シュウ:「へえ～～、そうなんや！」

鈴木:「彼女も、僕の事が『何故か気になっていた』とは言っていましたね。でも僕自身、まさか付き合う事になるとは全く思っていませんでしたよ。足を失うって分かった時には、『女の子と付き合う事はもうないだろうなあ』って思いましたから。」



シュウ:「え～！？そこだけはネガティブやん！」

鈴木:「女の子とつきあっても、最終的に別れる時には足のせいにされるんじゃないかなって思ったんですよね。苦労するから、とか、人と違うから、とか…。まあ、当時はまだそういう考え方もしていたんですよね。」

シュウ:「でも今になってみれば、家族があるっていいでしょ？ スポーツ選手って、奥さんがいる事で伸びる人も多いし。何より、人間、守るものができると変わってくるでしょ？」

鈴木:「どうだろう…あんまり変わってないですけどね、僕。」

シュウ:「この男、まだまだいけるわ！（笑）…でもさ、ほんと、その義足のお陰でものすごいいろんなものが見えてくるやん。リアルなものが。何が大切か、とか。その見え方ってきつとすごいよね。嫁さんともそれがなかったら出会ってない訳でしょ？ それって、ほんまにすごいことやと思う。

あと、今までの話を聞いてて思うのは、どの場面においても共通してるのが、自分の心にほんとに正直に動いてるってこと。場面場面のチョイスの仕方がものすごくシンプル。『面白い』『面白そう』。で、とにかくやってみる。ほいで、やってみて『ちゃうな～』って思ったら戻るしね（笑）。ほんとに軽やかなんだよね。」

鈴木:「そんな深く考えてないだけでしょ。先が見えてたらつまらないじゃないですか。」

シュウ:「『あんまり深く考えてない』って言葉は女性には言わん方がええよ（笑）。」

鈴木:「でも、やっぱり応援してくれる人が増えたっていうのはすごくありがたいですね。1人で試合をやっている感覚が無いんですよね。家族にいいジャンプを見せたいっていうのもありますからね。子供にカッコいいところを見てもらいたいなって。」

シュウ:「それは強いよね。例えばオリンピックで、同格の相手と決勝を戦う時、ただ相手を倒す事だけを考えて戦っても勝たれへんって話を聞いたことがあるんよ。最後の最後、何で勝てるかって言ったら『愛』なんやて。娘のため、とか、応援してくれてる人達のため、とか、そういう気持ちが後押ししてびっくりするような力が出るんちゃうかなあ。」

鈴木:「そういうのはあるかもしれないですね。」

シュウ:「うわ！もうこんな時間や！！じゃあ最後に、今1番したい事は？」

鈴木:「たくさんあるけど…でも、やっぱり1番は、世界記録を作りたいですね。『義足をつけての初のスポーツ選手』もそうだったけど、世界記録も『初』じゃないですか。金メダルを獲っている人はいっぱいいるけれど、世界記録だったら『初』になりますからね。」

シュウ:「そうやな～。世界記録は『初』や！その時代に『初めて』っていうのがええんやんな。」

鈴木:「今回、パラリンピックの旗手をやらせてもらったんですけど、これも一緒に、旗手って1人しかいないじゃないですか。意外と目立つんですよ、旗手って。だからやらせてもらえてよかったなあ～って（笑）。」

シュウ:「あはは！せやな～！（笑）。今日はほんと、長々とありがとうご



ざいました！」

鈴木:「こちらこそ、ありがとうございました。」

※本ページには喫煙に関する特定の考え方が掲載されておりますが、その内容はゲストの鈴木徹さん、インタビュアーの山本シュウさん個人の意見であり、当サイトのマナーや喫煙に関する考え方を示すものではありません。